

『三国遺事』 訳註（六）

凡 例

一、本稿は一然撰『三国遺事』の原文、読み下し文、口語訳および註であり、底本には学東叢書本『三国遺事』（学習院東洋文化研究所刊、一九六四年）を用いた。

一、原文は旧漢字を用い、句読点を施した。また底本の文字を改めた場合は、その文字に数字（①②③…）を付して原文のあとに異同を記した。校訂に際しては、韓国古典叢書本（民族文化推進会刊、一九七三年）および晩松文庫本（高麗大学中央図書館刊、一九八三年）と校合し、その他の活字本等を参照した。なお内容によって文を適当な段落に区切り、割註は（ ）で示した。

一、読み下し文は旧漢字・新かなづかいを用いた。

一、口語訳は新漢字・新かなづかいを用い、訳出にあたつて補った文は「 」で示した。

一、註は口語訳の文中に数字（（１）（２）（３）…）を付し、文末に一括した。なお参考文献等の提示は必要最小限にとどめた。

一、『三国遺事』は王暦と紀異篇以下の本文とからなるが、さしあたり

第一巻紀異篇から訳出を開始する。

一、本稿は新羅史研究会（代表武田幸男）における共同研究の成果である。研究会参加者が分担して訳註の原案を提示し、全体の討議を経て原稿を作成した。

新羅史研究会

新羅始祖 赫居世王

〔原文〕

新羅始祖 赫居世王

辰韓之地、古有六村。一曰閼川楊山村。南今疊嚴寺。長曰謁平、初降于瓢岳峯。是爲及梁部李氏祖。（奴礼王九年、置名及梁部。本朝太祖天福五年庚子、改名中興部。波替東山彼上東村屬焉）二曰突山高墟村。長曰蘇伐都利、初降于兄山。是爲沙梁部（梁、讀云道。或作涿、亦音道）鄭氏祖。今日南山部、仇良伐麻等烏道北迴德等南村屬焉（稱今日者太祖所置也。下例知）。三曰茂山大樹村。長曰俱（一作仇）禮馬、初降于伊

山（一作皆比山）。是爲漸梁（一作涿）部、又牟梁部孫氏之祖。今云長福部、朴谷村等西村屬焉。四曰觜山珍支村（一作賓之、又賓子、又水之）。長曰智伯虎、初降于花山。是爲本彼部崔氏祖。今日通仙部、芝巴等東南村屬焉。致遠乃本彼部人也。今皇龍寺南味吞寺南有古墟、云是崔侯古宅也殆明也。五日金山加利村（今金剛山栢栗寺之北山也）。長曰祇沱（一作只他）、初降于明活山。是爲漢歧部、又作韓歧部裴氏祖。今云加德部、上下西知乃兒等東村屬焉。六曰明佑山高耶村。長曰虎珍、初降于金剛山。是爲習比部薛氏祖。今臨川部、勿伊村仍仇旃村關谷（一作葛谷）等東北村屬焉。按上文、此六部之祖似皆從天而降。弩禮王九年、始改六部名、又賜六姓。今俗中興部爲母、長福部爲父、臨川部爲子、加德部爲女、其實未詳。

前漢地節元年壬子（古本云、建虎元年、又云建元三年等、皆誤）三月朔、六部祖各率子弟、俱會於關川岸上、議曰、我輩上無君主臨理蒸民、民皆放逸、自從所欲。蓋覓有德人爲之君主、立邦設都乎。於是、乘高南望楊山下、蘿井傍異氣如電光垂地、有一白馬跪拜之狀。尋檢之、有一紫卵（一云青大卵）、馬見人長嘶上天。剖其卵、得童男、形儀端美。驚異之、浴於東泉（東泉寺、在詞腦野北）、身生光彩、鳥獸率舞、天地振動、日月清明。因名赫居世王（蓋鄉言也。或作弗矩內王、言光明理世也。說者云、是西述聖母之所誕也。故中華人讚仙桃聖母、有娠賢肇邦之語、是也。乃至雞龍現瑞產闕英、又焉知非西述聖母之所現耶^③）。位號曰居瑟邯（或作居西干。初開口之時、自稱云闕智居西干一起。因其言稱之。自後爲王者之尊稱）。時人爭賀曰、今天子已降。宜覓有德女君配之。是日、沙梁里闕英井（一作娥利英井）邊、有雞龍現。而左脇誕生童女（一云、

龍現死而剖其腹得之）。姿容殊麗、然而唇似雞觜。將浴於月城北川、其觜撥落。因名其川曰撥川。營宮室於南山西麓（今昌林寺）、奉養二聖兒男以卵生。卵如瓠、鄉人以瓠爲朴。故因姓朴。女以所出井名之。二聖年至十三歲、以五鳳元年甲子、男立爲王。仍以女爲后。國號徐羅伐、又徐伐（今俗訓京字云徐伐、以此故也）、或云斯羅、又斯盧。初王生於雞井、故或云雞林國、以其雞龍現瑞也。一說、脫解王時得金闕智、而雞鳴於林中。乃改國號爲雞林。後世遂定新羅之號。理國六十一年、王升于天、七日後、遺體散落于地。后亦云亡。國人欲合而葬之、有大蛇逐禁、各葬五體爲五陵、亦名蛇陵。曇嚴寺北陵是也。太子南解王繼位。

①【今】底本は令につくる。

②【浴】底本は俗につくる。

③【所】底本は听につくる。

④【已】底本は已につくる。

「読み下し文」

新羅始祖 赫居世王

辰韓の地、古え六村有り。一に曰く、闕川楊山村。南は今の曇嚴寺なり。長は謁平と曰い、初め瓢岳峯に降る。是れ及梁部の李氏の祖たり（奴礼王九年、置きて及梁部と名づく。本朝の太祖の天福五年庚子、改めて中興部と名づく。波替・東山・彼上の東村、これに屬す）。二に曰く、突山高墟村。長は蘇伐都利と曰い、初め兄山に降る。是れ沙梁部（梁、讀みて道と云う。或いは涿に作るも亦、音は道なり）の鄭氏の祖たり。今、南山部と曰い、仇良伐・麻等鳥・道北・迴德等の南村、これ

に屬す（今日うと稱するは、太祖の置きし所なり。下は例して知るべし）。三に曰く、茂山大樹村。長は俱（一に仇に作る）禮馬と曰い、初め伊山（一に皆比山に作る）に降る。是れ漸梁（一に涿に作る）部、又は牟梁部の孫氏の祖たり。今、長福部と云い、朴谷村等の西村、これに屬す。四に曰く、觜山珍支村（一に賓之、又賓子、又水之に作る）。長は智伯虎と曰い、初め花山に降る。是れ本彼部の崔氏の祖たり。今、通仙部と曰い、芝巴等の東南村、これに屬す。致遠は乃ち本彼部の人なり。今、皇龍寺の南の味吞寺の南に古墟有りて、是れ崔侯の古宅なりと云うは、殆んど明らかなり。五に曰く、金山加利村（今、金剛山の栢栗寺の北山なり）。長は祇沓（一に只他に作る）と曰い、初め明活山に降る。是れ漢歧部、又韓歧部に作るの裴氏の祖たり。今、加徳部と云い、上・下西知・乃兒等の東村、これに屬す。六に曰く、明佑山高耶村。長は虎珍と曰い、初め金剛山に降る。是れ習比部の薛氏の祖たり。今、臨川部にて、勿伊村・仍仇旃村・闕谷（一に葛谷に作る）等の東北村、これに屬す。上文を按ずるに、此れ六部の祖、皆天從りして降れるに似たり。髻禮王九年、始めて六部の名を改め、又、六姓を賜う。今、俗に中興部もて母と爲し、長福部もて父と爲し、臨川部もて子と爲し、加徳部もて女と爲すも、其實未だ詳らかならず。

前漢の地節元年壬子（古本に建虎元年と云い、又、建元三年等と云うは、皆誤りなり）三月の朔、六部の祖、各子弟を率いて、俱に闕川の岸ほとりの上に會し、議して曰く、

我輩、上に君主の臨みて蒸民を理むる無く、民、皆放逸して、自ら欲する所に從えり。盍ぞ有徳の人を覓めて之れを君主と爲し、邦

を立て都を設けざらんや。

と。是において、高きに乗り、南のかた楊山の下を望むに、蘿井の傍に異氣あり。電光の地に垂るるが如くして、一の白馬、跪拜するの狀有り。尋ねて之を撿ずれば、一の紫卵（一に青大卵と云う）有り。馬、人を見るや長く嘶きて天に上る。其の卵を剖くるに、童男を得。形儀端美なり。驚きて之を異とし、東泉（東泉寺、詞腦野の北に在り）に浴せしむ。身は光彩を生じ、鳥獸率い舞い、天地振動して、日月清明たり。因りて赫居世王と名づく。（蓋し郷言なり。或いは弗矩内王に作る。光明もて世を理むるを言うなり。説く者云う、「是れ西述聖母の誕む所なり」と。故に中華の人、仙桃の聖母を讃ずるに、「賢を娠み邦を肇む」の語有るは是なり。乃ち雞龍の瑞を現わして闕英を産むに至るも、又、焉んぞ西述聖母の現わる所にあらざるを知らんや）位は號して居瑟邯（或いは居西干に作る。初め口を開きし時、自ら稱して闕智居西干と云いて一たび起つ。其の言に因りてこれを稱す。自後、王者の尊稱と爲す）と曰う。時人、争い賀して曰く、

今、天子已に降る。宜しく有徳の女君を覓めて之れに配すべし。

と。是の日、沙梁里の闕英井（一に娥利英井に作る）の邊に、雞龍の現わるる有り。而して左の脇より童女（一に、「龍、現われて死す。而して其の腹を剖きて之を得たり」と云う）を誕生す。姿容は殊に麗わし。然れども唇は雞の觜に似たり。將に月城の北の川に浴せしめんとするに、其の觜、撥落す。因りて其の川を名づけて、撥川と曰う。宮室を南山の西麓（今の昌林寺なり）に營み、二聖兒を奉養す。男、卵を以て生まる。卵は瓠の如し。郷人、瓠を以て朴と爲す。故に因りて姓は朴たり。女は

出でし所の井の名を以て之に名づく。二聖、年十三歳に至るや、五鳳元年甲子を以て、男、立ちて王と爲る。仍りて女を以て后と爲す。國、徐羅伐、又は徐伐（今、俗に京字を訓みて徐伐と云うは、此れを以ての故なり）と號す。或いは斯羅、又は斯盧と云う。初め、王、雞井より生まるが故に、或いは雞林國と云う。其の雞龍、瑞を現わすを以てなり。一に説く、

脱解王の時、金閼智を得。而して雞、林中に鳴く。乃ち國號を改めて雞林と爲す。

と。後世、遂に新羅の號を定む。國を理むること六十一年、王、天に升り、七日の後、遺體地に散落す。后も亦亡ずと云う。國人、合して之を葬らんと欲するに、大蛇の逐いて禁む有り。各、五體を葬りて五陵と爲し、亦、蛇陵と名づく。曇嚴寺の北の陵、是れなり。太子の南解王、位を繼ぐ。

「口語訳」

新羅始祖 赫居世王

辰韓の地には、むかし六つの村があつた。一つは閼川楊山村である。⁽²⁾ その南は今の曇嚴寺である。村の長は謁平といい、その初めは「天から」瓢岳峯に降つた。⁽⁵⁾ これが及梁部の李氏の始祖である。⁽⁷⁾（奴礼王九年、⁽³⁾「この部を」置いて及梁部と名づけ、本朝「高麗」の太祖の天福五「九四〇」年庚子に、中興部と改名した。波替・東山・彼上の東部の村がこれに属した。）二つは、突山高墟村である。村の長は蘇伐都利といい、その初めは「天から」兄山に降つた。これが沙梁部（梁は

道と發音する。あるいは涿と書くが、それもまた音は道である）の鄭氏の始祖である。今は南山部といい、仇良伐・麻等鳥・道北・迴德等の南部の村がこれに属した。（「今いう」というのは、太祖が設置したものである。以下の例も同様である）。三つは茂山大樹村である。村の長は俱（仇とも書く）札馬といい、その初めは「天から」伊山（皆比山とも書く）に降つた。これが漸梁（涿とも書く）部、または牟梁部の孫氏の始祖である。今は長福部といい、朴谷村等の西部の村がこれに属した。四つは觜山珍支村（賓之、または賓子、または氷之とも書く）である。村の長は智伯虎といい、その初めは「天から」花山に降つた。これが本彼部の崔氏の始祖である。今は通仙部といい、芝巴等の東南部の村がこれに属した。崔致遠がすなわち本彼部の人である。今、皇龍寺南方の味吞寺の南に廢墟があつて、これを崔致遠侯の遺宅であるというのは、殆んど明らかなことである。五つは金山加利村である。（今の金剛山の栢栗寺の北方の山である）村の長は祇沓（只他とも書く）といい、その初めは「天から」明活山に降つた。これが漢歧部（または韓歧部とも書く）の裴氏の始祖である。今は加徳部といい、上西知・下西知・乃兒等の東部の村がこれに属した。六つは明活山高耶村である。村の長は虎珍といい、その初めは「天から」金剛山に降つた。これが習比部の薛氏の始祖である。今は臨川部であり、勿伊村・仍仇弥村・閼谷（葛谷とも書く）等の東北部の村がこれに属した。以上の文を考えてみると、この六部の始祖は、皆、天から降つて来たかのである。努礼王九年、始めて六部の名を改め、また六姓を与えた。今、俗に中興部を母とし、長福部を父とし、臨川部を息子とし、加徳部を娘とするが、その実際のところ

ろはよくわからない。

前漢⁽³⁷⁾の地節元（前六九）年壬子（古本に建虎元「二五」年とあったり、又、建元三「前一三八」年としたりしているのは、皆誤りである）三月の朔に、六部の始祖がそれぞれ子弟をひきつれて、閼川のほとりに集まり、相談して、

我々は、上に君主がいて民を治めることがなく、民は皆放逸して、欲のままにふるまっている。どうして、徳のある人を探し出し、この人を君主に戴き、国を建てて都を定めないことがあろうか。

と語りあった。そこで、高いところに上つて南の方角に楊山の麓を望むと、蘿井⁽³⁸⁾の傍に異様な精気が電光のように地上に垂れ下がり、一頭の白馬が跪拜する様子が見えた。尋ねてこれを調べてみると、一個の紫の卵（青い大きな卵ともいう）があり、馬は人を見ると長く嘶いて天に上つていった。その卵を剖てみると、童児が現れたが、その姿としぐさは端正で美しかった。皆は驚き不思議に思い、東泉⁽³⁹⁾（東泉寺が詞腦野の北にある）で産湯をつかわせると、体はきらやかな光を放ち、鳥や獣たちはつれだって舞い、天地は振動して、太陽と月は清らかに明るく照らした。このため赫居世王と名づけた。（おもうに新羅の言葉であろう。あるいは弗矩内王とも書くが、それは光輝いてこの世を治めるという意味である。ある人は、「赫居世王は西述の聖母が産んだのである」と言っている。だから中華の人が、仙桃の聖母を称賛して、「賢者を身ごもりその子が国を建てた」と語るのはこのことをさしているのである。だから、雞龍が瑞兆を現わして閼英を産んだこともまた、西述の聖母が「雞龍の姿をとつて」現われたのではないと言えようか）王の位号は居瑟邯

（あるいは居西干とも書く。初めて口を開いた時に、自ら閼智居西干と言つて起ち上がったが、その言葉に因んで居西干と称するのである。それ以後、王者の尊称となった）という。この時、人々は先を争つて祝賀して、

今や天子が降られた。徳のある女子を探し出してめあわせなければならぬまい。

と述べた。この日、沙梁里の閼英井⁽⁴⁰⁾（娥利英井とも書く）のほとりに、雞龍が現われた。そして左の脇から女兒（一説には、「龍が現われて死んだ。そしてその腹を剖いて女兒を得た」ともいう）が誕生した。容姿はこのほか麗しかったが、唇は雞の觜のようであつた。月城の北の川で産湯をつかわせようとすると、その觜が撥ねて落ちた。これに因んでその川を撥川と名づけた。宮室を南山の西の麓（今の昌林寺である）に建て、二人の聖児を奉つて養ひ育てた。男児は、卵から生まれた。卵は瓠のようであり、新羅の人々は、瓠を朴と言う。だから、それに因んで姓は朴と称した。女兒は生まれ出た井戸の名に因んで「閼英と」名づけた。二人の聖児が十三歳になった五鳳元⁽⁴¹⁾（前五七）年甲子に、男児は即位して王となった。そこで女兒を后とした。国号を徐羅伐⁽⁴²⁾、または徐伐（今、俗に京の字を訓じて徐伐と言うのは、このためである）とした。あるいはは斯羅⁽⁴³⁾、または斯盧ともいう。初め王が雞井から生まれたので、あるいは雞林國ともいう。それは雞龍が瑞兆を現わしたことによるのである。一説では、

脱解王⁽⁴⁴⁾の時、金閼智を得たが、その時雞が林の中で鳴いた。だから国号を改めて雞林とした。

(2)

ともいう。後世には、やがて新羅という国号に定まっていた。国を治めること六十一年にして、赫居世王は、天に升ったが、七日後に、王の遺体が地に落ちて散乱した。后もまた亡くなったという。国の人々は、二人を合葬しようとしたが、大蛇が走り回りさえぎった。そこで五体⁽³⁾を別々に葬って五つの陵を造り、また蛇陵と名づけた。曇厳寺の北にある陵がこれである。太子の南解王が、位を継いだ。

〔註〕

(1) 【新羅始祖 赫居世王】本条は新羅の建国説話を述べたものであるが、対応する記事が、『三国史記』卷一・新羅本紀一・始祖赫居世居西千の即位紀、五年条、六一年条にそれぞれみられる。参考までに原文を掲げれば次の通りである。

〔即位紀〕始祖姓朴氏、諱赫居世、前漢孝宣帝五鳳元年甲子、四月丙辰（一日正月十五日）、即位、號居西千。時年十三、國號徐那伐。先是、朝鮮遺民、分居山谷之間、爲六村。一日閼川楊山村。二曰突山高墟村。三曰鷲山珍支村（或云干珍村）。四曰茂山大樹村。五曰金山加利村。六曰明活山高耶村。是爲辰韓六部。高墟村長蘇伐公、望楊山麓、蘿井傍林間、有馬跪而嘶。則往觀之、忽不見馬、只有大卵。剖之、有嬰兒出焉。則收而養之。及年十餘歲、岐嶷然夙成。六部人以其生神異、推尊之。至是立爲君焉。辰人謂瓠爲朴。以初大卵如瓠、故以朴爲姓。居西千、辰言王（或云呼貴人之稱）。

五年春正月。龍見於閼英井、右脇誕生女兒。老嫗見而異之、收養之、以井名名之。及長有德容。始祖聞之、納以爲妃。有賢行、能內輔。時

人謂之二聖。

六十一年春三月。居西千升遐、葬蛇陵。在口嚴寺北。

本条の内容は『三国史記』に比べるとはるかに豊富であるが、物語の基本的枠組みは同じである。したがって両者を比較することで、その間の新羅建国説話の展開過程をうかがい知ることができよう。

(2)

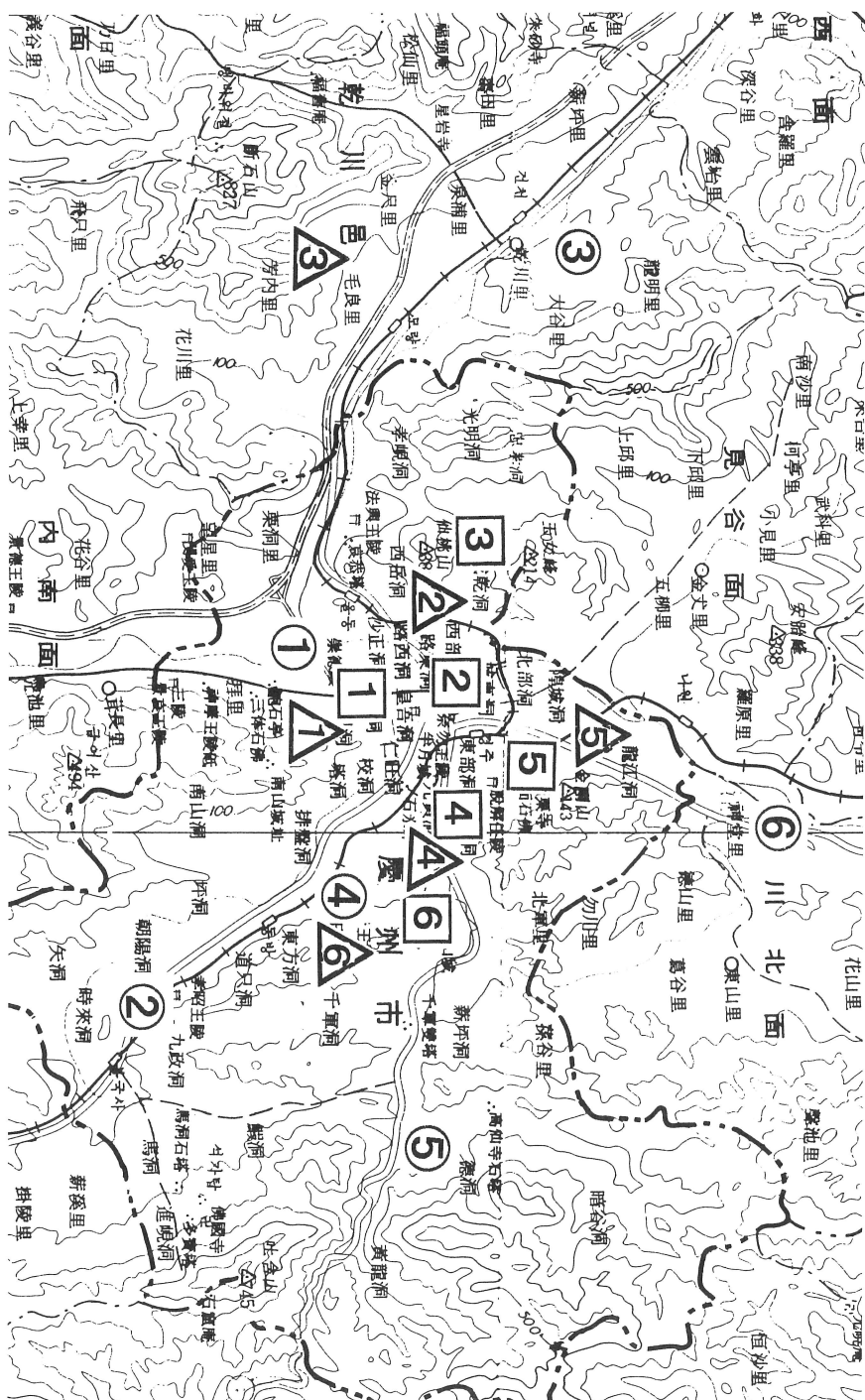
【辰韓の地には、むかし六つの村があった】辰韓については本書卷一・紀異・辰韓条参照。新羅が六村から始まるという認識は、『三国史記』も同様である。しかし、本条では六村長が天から降ったとするのに対して、『三国史記』では「是より先、朝鮮の遺民、分かれて山谷の間に居り、六村を爲す」（註1参照）とあるように、村長天降説をとっていない。六村の起源に関して、『三国遺事』と『三国史記』で系統観を異にしていることが注目される。本条では、この辰韓時代の六村がやがて新羅の六部に改められ、さらに高麗時代の慶州六部に至るという変遷観が示されているが、その内容を整理すれば、表の通りである。このうち、六村はあくまでも六部の起源伝承として理解すべきものである。村は、三国時代の新羅では城とともに地方統治の基底をなし、統一期に入っても郡県制の末端行政区画として機能していた。六村はそうした新羅の村を背景に、六部の前身として仮託されたものであろう。また、高麗時代の慶州六部は新羅の六部そのものではなく、その改編・拡大されたものである（末松保和「新羅六部考」『末松保和朝鮮史著作集1 新羅の政治と社会 上』吉川弘文館、一九九五年）。新羅の六部とは慶州盆地に居住した六つの地縁集団であり、同時にそれは新羅王京人の政治的社会的組織であった。また「南山新城第三碑」（五九一年）に「喙部主刀里」とあるように、六世紀末にはすでに

高麗中期 の現地	高麗初期 の部名	姓	部名	村長降 誕地	村長	村名	
波替・東 山・彼上 の東村	中興部	李氏	及梁部	瓢岳峯	謁平	關川 楊山村	1
仇良伐・ 麻等鳥・ 道北・迴 德等の南 村	南山部	鄭氏	沙梁部 (沙涿部)	兄山	蘇伐都利	突山 高墟村	2
朴谷村等 の西村	長福部	孫氏	漸梁部 (漸涿部、 牟梁部)	伊山 (皆比山)	俱礼馬 (仇礼馬)	茂山 大樹村	3
芝巴等の 東南村	通仙部	崔氏	本彼部	花山	智伯虎	背山 珍支村 (賓之・ 賓子・氷 之)	4
上西知・ 下西知・ 乃兄等の 東村	加徳部	裴氏	漢岐部 (韓岐部)	明活山	祗沱 (只他)	金山 加利村	5
勿伊村・ 仇弥村・ 閼谷(葛 谷)等の 東北村	臨川部	薛氏	習比部	金剛山	虎珍	明活山 高耶村	6

3)

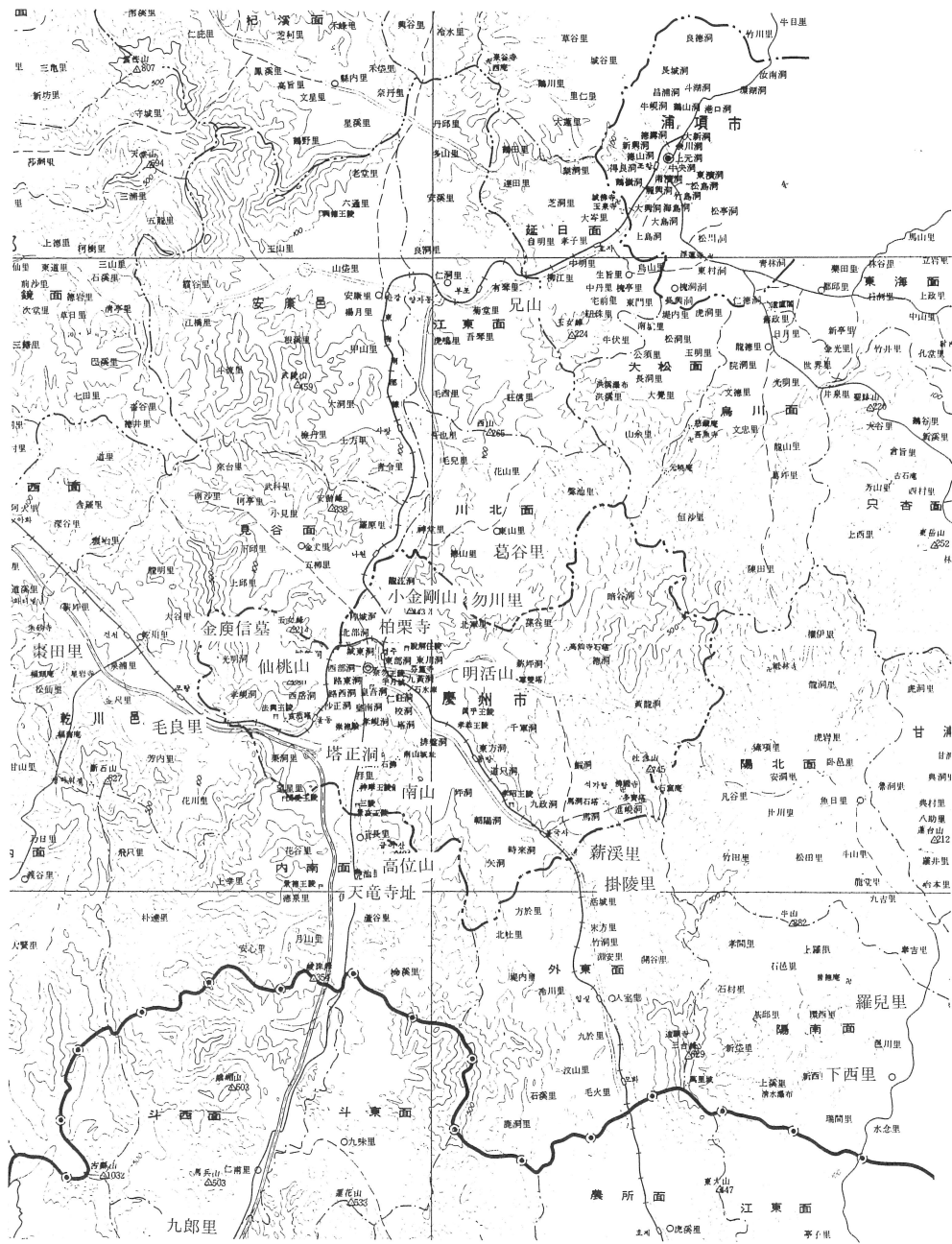
王京地域の地区分として機能していた。その成立については、かつて六世紀の三部制から七世紀の六部制に至る歴史の変遷を想定する見解があったが、近年発見された「蔚珍鳳坪碑」(五二四年)に「新羅六部」の字句があることから、六世紀前半にはすでに制度的確立を見ていたことが確実となった。したがってその起源は五世紀にまで遡るとみてよい。七世紀中頃を境に政治的社会的組織としての特質を弱めるなど、その性格を大きく変化させながらも、六部は少なくとも六世紀初頭から一〇世紀前半の新羅滅亡まで、四〇〇年間にわたって存続したのである。本条前半部は、こうした新羅六部に関する基本資料として重視される。なお六村(六部)の位置比定をめぐっては諸説あるが、参考までに、今西龍「新羅旧都慶州の地勢及び其遺蹟遺物」(『新羅史研究』国書刊行会、一九七〇年)、李丙燾「新羅の起源問題」(『韓国古代史研究』学生社、一九八〇年)、金元龍「斯盧六村斗 慶州古墳」(『歴史学報』七〇輯、一九七六年、ソウル)で示された比定案を図示すれば、地図1「新羅六村(六部)比定図」の通りである。

【閼川楊山村】閼川楊山村は閼川のほとりにある楊山村という意味であろう。閼川については、後文に六部の始祖が閼川のほとりに会したとある。また『三国史記』にもその名が散見されるが、そのうち卷十・新羅本紀十・元聖王即位紀には「周元、京北二十里に宅す。会大いに雨ふりて、閼川の水漲り、周元、渡るを得ず」とあり、その位置を知る上で参考になる。閼川の名はその後も見られ、『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・山川条には、「東川(一に北川と云う。一に閼川と云う。府の東五里に在り。楸嶺より出でて堀淵に入る)」とあり、現在の慶州市東川洞の北



地圖 1 「新羅六村 (六部) 比定圖」

- 1、關川楊山村・及梁部
 - 2、突山高墟村・沙梁部
 - 3、茂山大樹村・漸梁部
 - 4、舊山珍支村・本彼部
 - 5、金山加利村・漢歧部
 - 6、明活山高耶村・習比部
- …今西龍說、□…李丙燕說、△…金元龍說



地図 2 「慶州地域地形図」

川北岸には、「関川脩改記」（推定一六四七年、黄壽永『韓国金石遺文』第五版、一九九四年、ソウル、一志社）が自然石に陰刻されている。以上から関川は現在の北川に該当するとみてよい。ただし、楊山村との関係から関川を現在の南川にあてる考えもある。楊山については、後文のように赫居世出現の地が「楊山の麓、蘿井の傍ら」であり、『新增東国輿地勝覧』巻二一・慶尚道・慶州府・古跡条は、その楊山蘿井を「府の南七里に在り」とする。また『三国史記』巻一・新羅本紀一・脱解尼師今即位紀には、「楊山の下、瓠公宅を望み、以て吉地と為す。詭計を設け、以て取りて之に居す。その地、後に月城と為る」とある。蘿井・月城との関係からみて、楊山は現在の南山をさしているのであろう。楊山村の位置比定については地図1を参照。

(4) 【曇巖寺】曇巖寺については、後文に赫居世王陵をさして「曇巖寺の北の陵、是れなり」とあるほか、本書巻三・興法三・阿道基羅条にも、「其の京都の内に七処伽藍の墟有り。（中略）七に曰く婿請田（今の曇巖寺なり）」とある。これに対して『三国史記』では、巻一・新羅本紀一・始祖赫居世居西千六一年条に「春三月、居西干、升遐す。蛇陵に葬る。□巖寺の北に在り」とあるように、曇巖寺と表記する（□は曇の欠字）。創建年次は不明。本書編纂時には存在したが、『新增東国輿地勝覧』巻二一・慶尚道・慶州府・古跡条に「曇巖寺（旧址、蛇陵の南にあり）」とあるので、朝鮮王朝前期には廢寺となっていたことがわかる。赫居世王陵（五陵・蛇陵）の南に位置していたとされ、実際、慶州市塔正洞の五陵（史蹟一七二）周辺には寺址がいくつか存在するが、その内のどれが曇巖（巖）寺址であるかは決定しがたい。

(5) 【瓢岳峯】『東京雜記』巻一・山川（新增）条に、「瓢巖、府の東北五里に在り。李謁平、降りて処る所なり。俗に伝う、新羅の時、此の巖の国都に害有るを以て瓢を種えて以て覆い、故に名づく、と」とある。現在の慶州市東川洞の小金剛山南麓に瓢岩と瓢岩碑閣がある。

(6) 【及梁部】新羅六部の一つ。及梁部は「元からの梁部」という意味。及はその訓（ミナ）によって元本の義（ミナ）を表したもので、沙梁の沙（新）に対応する（前問恭作「新羅王の世次と其の名につきて」『前問恭著作集』下、京都大学文学部国語学国文学研究室、一九七四年）。『三国史記』では梁部と表記され、六世紀の金石文史料では喙部・喙部と書かれる。『日本書紀』には喙部（巻二二・推古天皇一八（六一〇）年条）とある。沙梁部とともに六部中で優位を保っていた。特に「蔚珍鳳坪碑」（五二四年）によると、寐錦王である牟即智（法興王）がこの及梁部（喙部）所屬であり、当時の及梁部が新羅王権の政治的基盤をなしていたことがわかる。その位置比定については地図1参照。

(7) 【奴礼王】奴礼王は、後文に「弩礼王九年、始めて六部の名を改め、又、六姓を賜う」とあるように、新羅第三代弩礼王のことである。

(8) 【太祖の天福五年……中興部と改名した】天福は後晋の高祖代の年号で、その五年は九四〇年、太祖二十三年にあたる。『高麗史』巻五七・地理二・慶州府条に、「太祖二十三年、陞せて大都督府と為し、其の州の六部の名を改め、梁部を中興部と為し、沙梁を南山部と為し、本彼を通仙部と為し、習北（比）を臨川部と為し、漢祗を加徳部となし、牟梁を長福部と為す」とあって本条の記述と符合する。また同書巻二・太祖二十三年条には、「春三月、州府郡県の号を改む」とあり、この年に州府郡県の名が一斉に行

われたことを伝えている。その実例はすでに本書巻一・五伽耶条でみたところであるが、六部の改名もこうした全国的改革の一環であった。

- (9) 【波替・東山・彼上の東部の村】波替、東山、彼上の地名は他に例を見ず、不明。本条は中興部の位置を慶州東部とするが、『東京雜記』巻二・古蹟条では、当時の慶州府の南、月南・南建等の村にあてられている。南建は不明だが、月南の地名は現在の南山西麓の慶州市塔正洞に伝わっている。

- (10) 【突山高墟村】突山高墟村は突山のふもとにある高墟村という意味であろう。ただし突山は、新羅王都とその近傍の地名としては他に例を見ない。高墟は『三国史記』巻三二・雜志一・祭祀・小祀条に「高墟（沙梁）」とあり、沙梁部内の地名であることが確認できる。また同・巻四・新羅本紀四・眞平王四八（六二六）年条に「高墟城を築く」とあり、高位山（慶州市内南面葺長里）に遺存する山城がこれにあてられている。高墟村の位置比定については地図1参照。

- (11) 【蘇伐都利】蘇伐都利は『三国史記』では蘇伐公とある（註1参照）。都利は公に相当する人名語尾・尊称であろう。蘇伐は、本条後文にみえる徐伐と同音異表記であり、新羅の国号に因んだ名称である。

- (12) 【兄山】兄山に係する王都および近傍の地名としては、北兄山と西兄山がある。北兄山は、『三国史記』巻七・新羅本紀七・文武王一三（六七三）年条に北兄山城築城の記事が見え、同・巻三二・祭祀志・中祀条に「北兄山城（大城郡）」とある。また『慶尚道地理志』慶尚道・慶州府守令行祭条に「兄山、大王の神、府の北を相去ること三十里に在り」とあり、『新增東国輿地勝覽』巻二一・慶尚道・慶州府・山川条に「兄山（安康県の東二十一里に在り。新羅、北兄山と称し、中祀と為す）」とある。慶州

北方、慶州市江東面菊堂里の兄山がこれにあたり、現在も城址が存在する。次に西兄山は、『三国史記』巻四・新羅本紀四・眞平王一五（五九三）年条に西兄山城改築の記事が、さらに文武王一三（六七三）年条に増築記事がみえる。『新增東国輿地勝覽』巻二一・慶尚道・慶州府・山川条に「仙桃山（府の西七里にあり。新羅、西嶽と称し、或いは西述と称し、或いは西兄と称し、或いは西嶽と称す）」とある。現在の慶州市西岳洞の仙桃山がこれにあたり、現在も城址が存在する。

- (13) 【沙梁部】新羅六部の一つ。沙は新の義で、及梁部の及（元本の意）に対応する（前掲恭作「新羅王の世次と其の名につきて」前掲）。六世紀の金石文史料では沙喙部と表記され、『日本書紀』には沙喙（巻二二・推古天皇一八（六一〇）年条など）とある。及梁部とともに六部中で優位を保っていた。特に、「迎日冷水碑」（五〇三年）によると至都盧葛文王（智証王）が、また「蔚珍鳳坪碑」（五二四年）によると徒夫智葛文王（法興王弟の立宗）がそれぞれこの沙梁（沙喙）部所屬であり、当時の沙梁部が及梁部とともに新羅王権の政治的基盤をなしていたことがわかる。その位置比定については地図1参照。

- (14) 【梁は道と発音する】梁の音が道と同じであるという指摘は、本書巻一・辰韓条にもある。梁は喙・啄・涿・喙とも書かれてタク・トクと読まれたのであり、道はその頭音を伝えたものである（末松保和「新羅六部考」前掲）。

- (15) 【鄭氏】『三国史記』は沙梁部の姓を崔氏とし、所伝を異にしている（註36参照）。

- (16) 【仇良伐・麻等烏・道北・迴徳等の南部の村】仇良伐については、『新增

東國輿地勝覽』卷二・慶尚道・慶州府・驛院条に「仇良伐村院（府の南四十六里に在り）」とある。現在の蔚山市斗西面九郎里付近に比定される。麻等烏については、本書・卷三・塔像四・天竜寺条に「俗伝に云う逆水は、州の南、馬等烏村南流の川が是なり。又、是の水の源は大（天）竜寺に致る」とある。また『東京雜記』卷二・各同条にも「馬等烏より天竜寺に至るを三同と為す」とある。麻と馬が音通するので、馬等烏は麻等烏に他ならず、これによって麻等烏が天竜寺付近であったことがわかる。天竜寺址が高位山中腹の天竜谷（慶州市内南面聳長里）にあるので、麻等烏もその近傍に比定できる。道北、迴徳の二村は不明。

(17) 【茂山大樹村】茂山大樹村は茂山のふもとにある大樹村という意味であろう。しかし新羅王都およびその近傍の地名としては、茂山、大樹ともに不明である。大樹村の位置比定については地図1参照。

(18) 【漸梁（涿とも書く）部、または牟梁部】新羅六部の一つ。岑喙（蔚珍鳳坪碑・五二四年）、牟喙（南山新城第二碑・五九一年）とも表記される。その位置比定については地図1参照。

(19) 【朴谷村等の西部の村】朴谷村は、現在の慶州市乾川邑棗田里の西部に比定される。当地はかつての朴谷里であり、一九一四年の行政区区域統廃合によって棗田里に併合されたが、現在も集落名として朴谷（박실）の地名が残っている（ハングル学会編『韓国地名総覧』IV、一九七九年、ソウル）。なお『東京雜記』卷二・古蹟条では、長福部にあたる村として、この朴谷のほかにも牟梁をあげるが、牟梁は棗田里東南の乾川邑毛良里に該当する。

(20) 【贅山珍支村（賓之、または賓子、または氷之とも書く）】贅山珍支村は贅山のふもとにある珍支村という意味であろう。しかし贅山、珍支の地名

は他に例がなく、ともに不明。珍支の別名のうち、氷之は底本では氷之とあるが、現代朝鮮語音で賓（pin）と氷（ping）が音通するので、氷は水の誤刻または誤写である。賓之（pin-chi）、賓子（pin-cha）、氷之（ping-chi）はすべて音通とみてよい。ただ、これがなぜ珍支の別名であるのかは不明。珍（chin）と賓（pin）、氷（ping）は音が異なるので音通と見ることはできない。あるいは珍の字義である賓の音をとって珍支を賓支（po-chi）と読み、その音に近い賓之以下にあてたものか。賓子の地名は『東京雜記』卷二・各坊条に「東面路東三坊、沙里より陵旨に至るを内坊と為し、道音方洞より下薪に至るを外坊と為し、掛陵より竜加山に至るを賓子と為す」とみえており、現在の掛陵（慶州市外東邑掛陵里）付近に比定できる。珍支村の位置比定については地図1参照。

(21) 【本彼部】新羅六部の一つ。本波（迎日冷水碑・五〇三年、「蔚珍鳳坪碑」・五二四年、「明活山城作城碑」・五五一もしくは六一五年）、本波（昌寧碑・五六一年、「磨雲嶺碑」・五六八年）とも表記される。その位置比定については地図1参照。

(22) 【崔氏】『三国史記』は本彼部の姓を鄭氏とし、所伝を異にしている（註36参照）。

(23) 【芝巴等の東南部の村】本条は通仙部所屬の村として芝巴を挙げるだけだが、『東京雜記』卷二・古蹟条では賓子・芝巴の二村を挙げている。賓子は註20でみたように慶州市外東邑掛陵里付近であり、芝巴もその付近であろう。註20所引の『東京雜記』卷二・各坊条には、賓子に隣接する地名として下薪が見え、芝と薪は同義なので、芝巴をこの下薪付近に比定することが可能である。現在の慶州市外東邑薪溪里がこれに該当し、下薪の集落

名が現存する。

- (24) 【崔致遠がすなわち本彼部の人である】崔致遠は新羅末期の文人。本書卷一・馬韓条・註7参照。本文は崔致遠を本彼部の人とするが、『三国史記』卷四六・崔致遠伝には沙梁部の人とある。また本彼部の姓も、本条が崔姓とするのに対して『三国史記』は鄭姓としている(註36参照)。本文のように、六村(六部)に関する説明として特定の人物を挙げることは、他に見られず、特異である。おそらく本彼部Ⅱ崔姓を強調したものであるう。

- (25) 【味吞寺】本文に皇龍寺南方とあるだけで、正確な位置は不明。ただし慶州市九黄洞の皇龍寺址南方に三層石塔があり、現在ではこの付近一帯が味吞寺址にあてられている。

- (26) 【崔致遠侯の遺宅】現在、慶州市には崔致遠の遺宅と伝えられる遺跡が二カ所ある。一つは読書堂で、慶州市排盤洞、狼山の西北の山腹に位置する。今一つは上書荘で、慶州市校洞の南山土城北端に位置する。本条の遺宅に該当するのは、皇龍寺との位置関係から見て読書堂であろうが、この遺跡を崔致遠の遺宅とする伝承がどこまで遡るかは不明。なお上書荘については、『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・古跡条にその名が見えており、朝鮮王朝時代にはすでにその伝承があったことがわかる。

- (27) 【金山加利村】金山加利村は、金山のふもとにある加利村という意味であろう。本条の割注は、金山の加利村を金剛山栢栗寺の北山とし、その位置を明示している。金剛山は現在の小金剛山であり、栢栗寺はその山中に現存する(註28、29参照)。したがって加利村は小金剛山一帯ということになるが、付近に金山と加利の地名は見あたらない。あるいは金剛山を金山

と関連づけたものか。これとは別に、金山に関連する地名として、『三国史記』卷四三・金庾信伝(下)が、金庾信の埋葬地を金山原と伝えている。金庾信の墓は、『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・陵墓条に「府の西、西岳里に在り」とあり、現在、慶州市忠孝洞に金庾信將軍墓(史蹟二一)がある。この金庾信墓の伝承が正確であるならば、金山原は慶州西方に比定され、金山をこの方面に求めることも可能である。加利は不明。加利村の位置比定については地図1参照。

- (28) 【金剛山】金剛山については『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・山川条に、「金剛山(府の北七里にあり。新羅、北嶽と号す)」とある。現在の慶州市東北の小金剛山である。

- (29) 【栢栗寺】栢栗寺については本書卷三・塔像・栢栗寺条に、「雞林の北岳を金剛嶺と曰い、山の陽に栢栗寺有り」とある。また『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・仏宇条に、「栢栗寺(金剛山に在り。梅檀像有り)」とある。慶州市東北の小金剛山中腹に現存する。詳しくは栢栗寺条参照。

- (30) 【明活山】明活山については、『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・山川条に「明活山(府の東十一里に在り)」とある。今の明活山(慶州市普門洞)である。新羅王都の東に位置し、政治・軍事的に重要な地点であった。『三国史記』卷三四・地理志一に「新月城の東に明活城有り。周一千九百六歩」とあるように、山城が築かれており、現在でも土築と石築の城壁が遺存する(明活山城址、史蹟四七)。その築城年次について、本書王暦は慈悲麻立干時代とするが、『三国史記』卷三・新羅本紀三・実聖尼師今四(四〇五)条に「倭兵、来たりて明活城を攻む」とある

ので、五世紀初頭以前に築かれた可能性もある。以後、慈悲麻立干一六（四七三）年条、真興王一五（五五四）年条、真平王一五（五九三）年条に修・改築記事が見えており（同・巻三、四）、その維持・改修に新羅が意を用いたことがわかる。慈悲麻立干一八（四七五）年から炤知麻立干九（四八七）年までは王が明活城に移り住み、善德王一六（六四七）年の毗曇の乱に際しては、反乱軍がここを拠点に月城の王軍と対峙している。なお近年、築城を記念した「明活山城作城碑」（五五一年もしくは六一一年）が発見され、城壁築造の経緯や力役動員等を理解する上で貴重な史料となっている。

(31) 【漢歧部（または韓歧部とも書く）】新羅六部の一つ。漢祗部（『三国史記』巻一・新羅本紀一・儒理尼師今九年条など）、漢只（同・巻四・新羅本紀四・真平王五四年条）、漢只伐部（「雁鴨池出土調露二年銘磚」・六八〇年）とも表記する。その位置比定については地図1参照。

(32) 【上西知・下西知・乃兒等の東部の村】上西知・下西知村については、本書巻一・第四脱解王条にも「雞林の東、下西知村の阿珣浦（今、上西知・下西知の村名有り）」とある。また『新增東國輿地勝覽』巻二一・慶尚道・慶州府・烽燧条にも「下西知烽燧（府の東六十三里に在り。南は蔚山郡柳浦に応じ、北は禿山に応ず）」とあり、下西知の地名を伝えている。現在の慶州市陽南面に下西里の地名が残っており、上西里・下西里はこの地域に比定される。また乃兒村については、他に用例が見られないが、同じく慶州市陽南面に羅兒里がある。羅は語頭では^{rae}と発音され、乃の音は^{nae}であるので、乃兒＝羅兒とみてよいであろう。上・下西知村、乃兒村ともに東海岸である。

(33) 【明活山高耶村】明活山高耶村は、明活山（註30参照）のふもとにある高耶村という意味であろう。明活山は底本には明活山とあるが、『三国史記』赫居世居西干即位紀に「明活山高耶村」とあるように、活は活の誤刻または誤写である。高耶は不明。高耶村の位置比定については地図1参照。

(34) 【習比部】新羅六部の一つ。斯波（「迎日冷水碑」・五〇三年）、習部（「雁鴨池出土習部銘瓦磚」・推定六八一年、『日本書紀』巻二一・推古天皇一九（六一一年）年八月条）とも表記される。その位置比定については地図1参照。

(35) 【勿伊村・仍仇弥村・闕谷（葛谷とも書く）等の東北部の村】この三村については他に用例を見ないが、現在の慶州市東北の川北面に葛谷里があり、その南に隣接して勿川里がある。闕谷（葛谷）村は葛谷里に、そして勿伊村は勿川里に比定することができよう。仍仇弥村は不明。

(36) 【弩礼王九年、始めて六部の名を改め、また、六姓を与えた】同様の記事が『三国史記』巻一・新羅本紀一・儒理尼師今九年条に、「春、六部の名を改め、仍りて姓を賜う。楊山部を梁部と為す。姓は李なり。高墟部を沙梁部と為す。姓は崔なり。大樹部を漸梁部（一に牟梁と云う）と為す。姓は孫なり。干珍部を本彼部と為す。姓は鄭なり。加利部を漢祗部と為す。姓は裴なり。明活部を習比部と為す。姓は薛なり」とある。本条の六部名と六姓は註2の表に整理したとおりであるが、『三国史記』のそれと比較した場合、沙梁部と本彼部で姓に異同が見られる。なお、金石史料によって知られる六部の制度的確立時期は、およそ六世紀前半であり、六部成立を弩礼王代に置く本条の記事を史実と見なすことはできない。また六姓も、ほとんどが統一期以降に登場する姓であり、六部との対応関係も含めて、

これをそのまま信用することは困難である（武田幸男「朝鮮の姓氏」『東アジア世界における日本古代史講座』一〇、学生社、一九八四年）。

(37) 【前漢の地節元（前六九）年壬子……三月の朔】地節は前漢宣帝代の年号で、その元年は宣帝即位五年。建虎は建武で後漢光武帝代の年号。その元年は光武帝即位元年。建元は前漢武帝代の年号で、その三年は武帝即位三年である。

(38) 【蘿井】蘿井については、『新增東国輿地勝覽』巻二一・慶尚道・慶州府・古跡条に「楊山蘿井（府の南七里に在り）」とあり、現在も慶州市塔正洞にその伝承地が存在する（史蹟二四五）。

(39) 【東泉寺が詞腦野の北にある】東泉寺については、本書巻二・元聖大王条に「青池は即ち東泉寺の泉なり。寺記に云う、泉は乃ち東海龍、往來して法を聴きし地なり。寺は乃ち真平王の造る所にして、五百聖衆・五層塔並びに納められし田民あり、と」とあり、真平王代（五七九〜六三二）の創建になることがわかる。詞腦野は位置不明。詞腦は楽曲・舞・琴の名で、思内・詩悩とも書かれる（本書巻一・辰韓条・註26参照）。その原義を東部・東土・東方とする見解もあり（梁柱東『増訂古歌研究』序説三・詞腦歌、一潮閣、ソウル、一九六五年）、それに従えば新羅王都の東方にあったとしてもできるが、正確な位置はわからない。

(40) 【赫居世王と名づけた……弗矩内王とも書く】赫居世の居世は居西干の居西と同音異表記。居世を位号居西干の重複とみれば、始祖の諱は赫の一字だけということになる。弗矩内はpulkanと読まれ、赫の字義である赤（語幹pulk）・明（語幹palk）の連体形を表したものの（鮎貝房之進「新羅王位号、並に追封王号に就きて」『維攷・新羅王号攷朝鮮国名攷』国書刊行会、

一九七二年）。結局、赫・弗矩内はともに「輝く」・「明るい」を意味しており、本条が始祖名を「光り輝いて世を治める（光明理世）」と説明するのは、それをいったもの。

(41) 【赫居世は西述の聖母が産んだ】西述は、後出の仙桃と同じで、現在の慶州市西岳洞に位置する仙桃山のこと。『三国史記』巻三一・祭祀志・小祠の末尾に「西述（牟梁）」とあるように、国家的祭祀の対象であった。

『新增東国輿地勝覽』巻二一・慶尚道・慶州府・山川条には「仙桃山（府の西七里に在り。新羅、西嶽と号し、或いは西述と称し、或いは西兄と称し、或いは西鶯と称す）」とある。聖母はこの仙桃山の山神のことで、本書巻五・感通・仙桃聖母随喜仏事条に「神母、本中国帝室の女にして婆蘇と名づく。早に神仙の術を得て海東に帰止し、久しふして還らず。（中略）故に西鶯山神母と名づけ、久しく茲の山に抛りて邦国を鎮祐し、靈異甚だ多し。国を有ちてより已來、常に三祠の一と為し、秩は群望の上に在り」とある。また『新增東国輿地勝覽』の祠廟条には「聖母祠（西嶽仙桃山に在り）」とあり、現在も山中に聖母祠がある。西述の聖母が赫居世を産んだとする説については、右の仙桃聖母随喜仏事条参照。

(42) 【賢者を身（こ）もりその子が国を建てた】原文は「娠賢肇邦」であり、これに対応する句が、本書巻五・感通・仙桃聖母随喜仏事条に「大宋国使王襄、我が朝に到り、東神聖母女を祭るに、“賢を娠みて邦を肇む（娠賢肇邦）”の句有り」とある。本条でいう中華の人とは、この王襄をさすのであろう。なお仙桃聖母随喜仏事条の一文は、『三国史記』巻一二・新羅本紀一二の末尾に付された論贊からの引用である。詳しくは仙桃聖母随喜仏事条参照。

(43) 【居瑟邯（あるいは居西干とも書く）】居瑟邯と居西干は同音異表記。

邯・干は首長号として古代の東北アジアに広く見られる称号であり、新羅では君主号のほかに官位号にも多く用いられている。居瑟・居西の原義については諸説ある。白鳥庫吉は、居瑟邯・居西干は高句麗の古雛加、百濟の韃吉支と同一語であり、居西・古雛・韃はみな大を意味したとする（白鳥庫吉「漢史に見えた朝鮮語」『白鳥庫吉全集』三、岩波書店、一九七〇年）。また鮎貝房之進は、居西を居・在の敬称と理解し（「新羅王位号、並に追封王号に就きて」前掲）、それを受けた小倉進平が、居西干は「居らるる君」・「います君」の義であると主張する（「在城及び居世干名義考」『小倉進平著作集』（二）、京都大学文学部国語学国文学研究室、一九七五年）。さらに前間恭作は、居西は乞士・居士の謂で、仏家が始祖につけた尊号とし（「新羅王の世次と其の名につきて」前掲）、梁柱東は、居西は初・始の義で、居西干は始祖王（始君・元君）を意味したとする（『増訂古歌研究』釈注一・慕竹旨郎歌、前掲）。なお、『三国史記』が居瑟邯・居西干を始祖赫居世だけの王号とするのに対して、本書では第二代南解王に対しても用いられており、所伝を異にしている（本書王曆および巻一・第二南解王条参照）。

(44) 【閼英井（娥利英井とも書く）】閼英井については、『新增東国輿地勝覧』巻二一・慶尚道・慶州府・古跡条に「閼英井（府の南五里に在り）」と伝えられており、現在もその伝承地が慶州市塔正洞にある。娥利（*ᄒᆞᆫ*）と閼（*ᄒᆞᆫ*）が音通するので閼英と娥利英は同音異表記。本書王曆・新羅第一赫居世条には娥伊英・娥英とある。

(45) 【昌林寺】昌林寺については『新增東国輿地勝覧』巻二一・慶尚道・慶州

府・古跡条に、「昌林寺（金鰲山麓に新羅時の宮殿遺基有り。後人即ち其の地に此の寺を建て、今、廃さる）」とある。創建時期は不明。朝鮮王朝時代にはすでに廃寺となっており、その寺址が南山の西麓、鮑石谷（慶州市塔正洞）にある。寺址からは「昌林寺」銘のある瓦片が発見されており、三層石塔と亀趺が残存する。塔から出たとされる「新羅昌林寺無垢淨塔願記」（黄壽永編『韓国金石遺文』一九七六年、一志社、ソウル）には、八五五年、文聖王の発願によって石塔を建立したことが記されている。

(46) 【姓は朴と称した】本条および『三国史記』では朴姓の由来を、始祖出生の卵が瓠（*ᄒᆞᆫ*）に似ていたためとするが、始祖の名である弗矩内に因んだものとみるべきであろう。なお、新羅における朴姓の確かな使用例は七世紀中頃を遡らず、始祖の朴氏称姓を史実とすることはできない。

(47) 【五鳳元（前五七）年甲子】五鳳は前漢宣帝代の年号で、その元年は宣帝一七年、前五七年にあたる。赫居世が甲子年に即位したとするのは、讖緯思想の甲子革命説によったもの、またそれを五鳳年間の甲子年に求めたのは、高句麗（前漢宣帝建昭二年甲申、前三七年）と百濟（前漢成帝鴻嘉三年癸卯、前一八年）の建国紀年に先立つことを主張したもので、これを史実と見なすことはできない。

(48) 【徐羅伐または徐伐】徐羅伐は『三国史記』の赫居世即位紀には徐那伐とあり、同・巻三四・地理志一には徐耶伐とある。羅・那・耶が相通じるので、これらはすべて同音異表記である。伐は新羅の地名に多く見える火と同じく地名語尾であり、徐伐は徐羅伐の省略形であろう。徐羅・徐那・徐耶は斯羅・斯盧・新羅の対訳であり、結局これらは同一語の異表記にほかならない。その原義については、東方・東土説（梁柱東『増訂古歌研究』

序説三・詞腦歌、前掲）、神聖な樹林説（三品彰英「古代祭政と樹林」『建国神話の諸問題』平凡社、一九七一年）、首邑・首都説（李丙燾「新羅の起源問題」、前掲）など諸説ある。

- (49) 【新羅または斯盧】羅・盧が相通じるので新羅・斯盧は同音異表記。『三国史記』卷三四・地理志一にも「国号、徐耶伐と曰う。或いは斯羅と云い、或いは斯盧と云い、或いは新羅と云う」とある。中国史料では、『梁書』卷五四・新羅伝に「魏の時に新盧と曰い、宋の時に新羅と曰い、或いは斯羅と曰う」（新盧は斯盧の誤り）とあり、日本側でも『日本書紀』卷一七・継体天皇七（五一三）年一月条、同・卷一九・欽明天皇一五（五五四）年一二月条に斯羅の表記がみえる。金石文では、近年発見の「迎日冷水碑」（五〇三年）に斯羅とあり、六世紀初頭においても斯羅の表記が用いられていたことがわかる。

- (50) 【雞林国】本書および『三国史記』は第四代脱解王代に国名を雞林に改めたとする。しかし、これを史実と認めることは困難であり、新羅を雞林と呼ぶことがいつ頃から始まったかは不明である。ただし、唐が六六三年に新羅を雞林州大都督府としたことや、七世紀末から八世紀初に活躍した新羅の文人・金大問に『雞林雜伝』の著書があることからみて、七世紀後半にはすでに雞林の呼称が一般化していたと思われる。雞林の原義については、雞の訓(ari)と林の訓(spu)を借りて「喙の村」(ak-spu)をあらわしたとする見解がある（末松保和「新羅六部考」前掲）。これに従えば、新羅王都六部の喙（及梁）に由来する名称であったと理解できる。現在も雞林の伝承地が慶州市校洞にある（史蹟一九）。

- (51) 【脱解王の時……国号を改めて雞林とした】脱解王の時に国号を雞林と改

めたとする記事は、『三国史記』卷一・新羅本紀一・脱解尼師今九（六五）年条と卷三四・地理志一にも見える。本条がいう一説とは、それらをさすのであろう。詳しくは本書卷一・金閼智・脱解王代条参照。

- (52) 【後世には……定まっていた】当初さまざまに表記されていた国号がやがて新羅に定まったことについては、『三国史記』卷四・新羅本紀四・智証麻立干四（五〇三）年条に、「冬十月、群臣、上言す。“始祖創業以来、国名未だ定まらず。或いは斯羅と称し、或いは斯盧と称し、或いは新羅と言う。臣等以為らく、新は徳業日新たにして、羅は四方を網羅するの義なり。則ち其れ国号為るに宜し（下略）”と」とある。本文はこれによったのであろう。なお、金石文史料で国号表記の実際を見てみると、「広開土王碑」（四一四年）に新羅、「迎日冷水碑」（五〇三年）に斯羅、「蔚珍鳳坪碑」（五二四年）に新羅とあり、六世紀初頭まで表記が一定していない事実を確認できる。冷水碑に斯羅とあることは、一見すると右の智証麻立干四年条に抵触するかのようであるが、冷水碑の立碑が九月なので、両者は矛盾しない。新羅への国号表記統一は、この五〇三年を目安として、およそ六世紀初頭に実現したと見てよいであろう。

- (53) 【五体を別々に葬って……また蛇陵と名づけた】赫居世王陵について、『三国史記』では、「蛇陵に葬る。曇巖寺の北の陵、是なり」とあるように、五つの陵に葬ったとはしていない（註1参照）。さらに、南解・儒理・婆娑の三王をそれぞれその蛇陵園内に葬ったとも伝えており（同・卷一・各王条参照）、本条とは所伝を異にする。また『新增東国輿地勝覧』卷二一・慶尚道・慶州府・陵墓条では、「赫居世陵（曇巖寺の傍らに在り。中略）遂に五陵と号す。亦蛇陵と云う」とあるように、五陵全体を赫

居世王の墓とする。現在、慶州市塔正洞に五陵と伝えられる古墳があり
(史蹟一七二)、赫居世・閔英妃・南解・儒理・婆娑陵にあてられている。

(文責 木村 誠)